
フードロイド

bays.jp

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フードロイド

【ZPDF】

Z0816D

【作者名】

b a y s . j p

【あらすじ】

風俗産業向けの人工生命体「フードロイド」。比奈の細胞から培養されたフードロイド「梨乃」は人気商品となるが、シンクロ現象により彼女は徐々に人間性を失っていく。

（前書き）

HIVなどの社会問題をモチルに性と命、そして愛を描いた近未来
フィクション。

性風俗産業用人工生命体、通称「フードロイド」。

細胞ドナーとなつた比奈は、シンクロ現象により徐々に人間性を失
つていく。

複数のサイトに掲載しており、内容はヴァージョンによつて多少異
なつています。

最新版は、<http://bays.jp> よりリンクが貼つてあ
りますので、そちらからジャンプしてください。

「ンハア、ハア……ンンツ！……ンアツ！…」

男は果て、挿入したまま女の体の上でしばらくの間休んでいた。髪の匂いを嗅ぎながら余韻を楽しんだ男が店の外に出ると、そこには今しがた抱いていた女とそつくりな高校生が歩いていた。

「…こんな偶然って、あるんだな……」

比奈のバイト

「ねえ比奈、この辺はマズいんじゃないの？」

遊衣が歩きながら言った。

「え、どうして？」

「だつてほら、看板に……」

「ああ、もう慣れたし別に……」

2人が見る看板には、比奈とさくへつなフードロードの写真がプリントされていた。

「でもやっぱあ、顔もつと変えたほつが良かつたんじやないの？」

「だつて金額がぜんぜん違つたから……あーあつた、あそこだ」

比奈はそう言つて、2人の前方にあるアリコーズメントバーを指差した。

その店はアルコールメニューが中心だったが、多くの高校生は制服のまま入店して店内で着替えていた。

店に向かつて堂々と歩いていく比奈に対して、遊衣は辺りの様子を伺つてゐるようだつた。

「心配ないつて。こないだ入店を注意した学校側が敗訴したつてニュースあつたの知らないの？」

「え? そななの?」

「そう。そこまで干渉される必要ないって生徒の親が訴えて勝つたんだよ。だから学校は怖くて注意できないの」

比奈は軽い見た目の割りに勉強もできるし、ニュースなども良くなっていた。

2人は店内に入るとコスチュームルームに入つて着替えを始めた。

「アタシこの婦警にしよ。比奈は？」

「ワタシは客の指定でスク水」

「そんなんでホール出て大丈夫なの？」

「まあホール出るのはちょっとの間だし、少しくらい触られるのは別に気にしないよ」

2人はコスチュームに着替えると、扉を開けてホールへと出て行つた。

ホールはおよそ8割の客入りで、移動するには人の間をぬつて行かなければならなかつた。

「あ、いた。アレだ」

比奈は非常口灯の下にいる、薄茶色の地味なジャケットを着た男の方へと駆け寄つて行つた。

「ちよつ……待つて

遊衣が人の海にもまれてやつと比奈とその男のいるところにたどり着くと、すぐにプライベートエリアへと移動を始めた。

「どう？」の子もタイプでしょう？」

比奈は歩きながら男に言った。

「うん。僕は梨乃ちゃんがいれば1万2万の差はどうだつていいから……」

梨乃とは、比奈の細胞を培養して作られた風俗産業向けの人口生命体、通称フードロイドの名前だつた。

男は話を続けた。

「前はユメが一番好きだつたんだけど、今はもう梨乃ちゃんを人生の伴侶にするつて決めたんだ。定期預金崩してでも1体買うつもりだよ」

「あれって個人でも買えるの？」

「いちおう管理されてることになつてゐるけど闇オクとかで簡単に買えるんだよ」

話しながら歩いていると、男が足を止めた。

「「」の部屋だ」

男はジャケットのポケットからケータイを取り出し、ドアの横にあるリーダーにかざした。

ツチャ……

「ドアの鍵が、開きました」

リーダー部から声が流れる。

3人が部屋に入つてドアを閉めると、ドアには自動で鍵がかかつた。

「じゃあ約束だから、先にお金くれる?」

比奈がそう言つ前から男は現金を手にしていた。

現金を受け取つた比奈は金額の確認をすると、声色を変えて男に言つた。

「……よしきん、最近暗い顔してるけど……なんか嫌なこととかあつたの?」

男の呼び方はあらかじめメールで打ち合わせ済みだつた。

「え……ああ、なんていうか……自分に合つ仕事見つからなくて

……」

しかし比奈の突然の変貌に、男のほうが戸惑つていた。

遊衣もこれまでに2度その姿を見ていたが、その切り替えたの早さに驚いていた。

「無理しなくていいよ。よじへんこといつ仕事が見つかるまでいろいろやつてみて」

「…………うる…………」

言葉だけで男を優しく包み込む比奈の演技は、とても高校生とは思えないほどバッグンのものだった。

そして遊衣はそのドラマに入っていくことができず、ただ2人の様子を見守つていろだけだった。

「ねえ、よしぐん……ワタシ……こんなこといつの恥ずかしいけど……ワタシ、よしぐんがするといふ……見てみたいの……」

比奈は次のステージへと話を展開させた。

事前のメール打ち合わせでは、会話におよべ30分、その後男の自慰行為を30分見るという約束になっていた。

比奈は遊衣にアイコンタクトで、男の前へ来るよう指示を出した。

「よしぐん、出して。ワタシも……ほら」

そう言いながら、比奈は水着を引っ張つて乳首を男に見せた。

「ああ――――――！――！――梨乃ちや、梨乃ちやんんん――――！」

男はそう言いながらズボンとパンツを膝まで下ろし、怒張した性器をシートを出した。

ソロソロと男の前に移動し始めていた遊衣は、男の興奮が予想以上に激しくて少し離れた位置で固まってしまっていた。

「ナニカ……」

比奈は男に背を向け、四つん這いの状態で水着をずらし局部を露出した。

「ああ――――!――! ああああああ――――――――――!」

男は完全にトランス状態だった。

比奈は男の状態とシンクロするように叫んだ。

「…………ああり…………ああり…………ああり…………」

男は比奈の尻と局部を見ながら、オーガズムに達した。

傍らにいた遊衣には気づいてさえいないうようで、いつた後も男の目は比奈の姿に釘付けになつていった。

「あ……ありがとう、これで夢が叶ったよ。あとは君の分身と幸せになれるように頑張って生きていこう」

比奈と遊衣が部屋を出していく時、男は比奈にそう言った。

比奈と遊衣は「スチームルーム」で普通の服に着替えると、カフューナーのカウンター席に座ってドリンクを注文した。

「はいコレ、遊衣の分」

「え？ いいの？ アタシなんにも役にたってなかつたみたいなのに……」

遊衣は好奇心と小遣い田舎で比奈に細胞ドナーになることを相談していた。

しかし比奈は強く反対し、代わりに比奈がファンと直接の取り引きをする際に遊衣に手伝いを頼んだ。

男たちの醜態を見た遊衣は、フードロイドへの興味を失うのではないか。比奈にはその狙いもあった。

話をしていると、2人組みの男が比奈のまづくと近づいてきた。

「ひょっとして、梨乃のモデルの子？」

男が比奈に聞いた。

「やうだけえー。」

「やつぱつー、ベー、」の辺に住んでるの？

「ううさ。今田は仕事でここに来ただけ」

「仕事って？まだ高校生だつて噂だけど……」

「ちよつとしたバイトつてこと」

「あの、俺梨乃のファンです……」

「ありがと。今ちよつといの子と話してのから、あとでメールで連絡してくれる？」

比奈はやう言しながら、ケータイで田の前にあつた紙ナフキンに名刺情報をタシーンシングプリントして手渡した。

男たちが離れると比奈が言った。

「うーん、遊衣はいんな風に断つたりできる？」

「うーん……やつぱり面倒かなあ……でも整形加工すればそんなに問題ないと思つ……」

「整形加工するなんなら、たいしたお金になんないよ」

フードロイドの細胞ドナーの多くは、身分を隠すためにフードロイドの顔を整形加工することを選択していた。

整形加工をする場合には当然そのコストがかかるわけで、ドナーの手に渡る金額はその分少なくなる。

また顔のイメージがドナーとフードロイドで大きくかけ離れている場合、ドナーの会員制ファンクラブなど周辺事業による収益も見込めなかつた。

これに加え顔のイメージが変わらなければ、事実上比奈のよつてマネージメント会社を通さずに直接自分を売ることもできた。

フードロイドブーム

フードロイドは、生体の細胞を培養して造られる。

医療用生体パーツが人々にとつて身近になり始めた頃、先進国の人々や政治家が声高に主張を始めた。

「科学・医学がこれだけ発展した現代でも、性欲に思い悩む者、またその性欲による犯罪が後を絶たない。性欲解消のために生体パ

ーツを用いることは平和的利用と言える。性欲解消用生体パーツは欲望を満たし、傷つく者のいない幸福は世界を実現するであろう」と要約するところのような主張だ。

局部のみからスタートした風俗産業用生体パーツの開発は、予想どおりコーナーからの要望で培養範囲を徐々に広げていった。

頭から足先まである“完全体”と呼ばれるものが登場した頃、日本では現在の通称「フードロイド」が定着した。

しかし脳のないフードロイドは生命維持にコストがかかるため、関連企業は必死になつて脳の培養範囲をコントロールする技術の研究を行つた。

その結果、高度な知能は持たないが生命を維持し外的な刺激に反応するところのものが開発された。

「また人類は奴隸制度を繰り返すのか」

「人権なき人間を造り出し、凄惨な生涯を過ごさせるのか」

それまでのフードロイドとは違い、脳のあるフードロイドにはより強い倫理的非難の声が浴びせられた。

しかし関連企業が工作した公聴会では、単純な反射反応や生理反応があるだけで精神的苦痛を感じてはおりず、人間でも奴隸でもないといふ理論で反対派の声を押し切つた。

反射反応や生理反応があることは、フードロイドとしてはむしろ

望まし」とであった。

「顔があり、愛撫すると悶え濡れるフードローバイドは元壁といえるほどの性奴隸であった。

「……でも、男のフードローバイドも結構高値ついてるやーんだよ」

「でも、女の方が割り切れなくてストーカーになりやすいつてネットで噂なんってんじやん」

「だから顔変えるんだよ。顔変えても数十万はもられるらしいぜ」
昼休み、比奈の近くで男子がフードローバイドについて議論を交わしていた。

「なあ比奈、おまえストーカーとかの被害つて遭つたことある?」

議論の渦中にいた男子が言った。

「ワタシ?……街歩いてナンパはされるけど。そんなにしつこいファンはないよ」

「な?比奈くらこ有名でも平氣なんだから、問題ねえつて

その男子は悠人の方を振り返つて言つた。

比奈のフードロイドは、多くの男性誌で単独特集が組まれるほど話題商品となっていた。

「ここまで来た！現役女子高生の全身フードロイド”

”反射反応バツグン！感情が育つ可能性も！？”

電車内の吊り広告にも、フードロイド梨乃に関する見出しが踊っていた。

「比奈、参考までに聞いてみたいんだけど、フードロイドやるところへりへりい儲かるもんなの？」

「…………んー…………」めん、それは言っちゃいけないことになつてんの

事実、比奈はフードロイドメーカーから、契約金及びフードロイドに付随して得られる利益に関する一切の情報についての守秘義務を課せられていた。

「悠人、アンタフードロイドやる気？」

比奈が言った。

「いや、そんな気はないけど……それにドナーになるとき保護者の承諾がいるんだろ？つちはそんなの無理だと思つじ……」

悠人はそこまで言いかけて、それ以上家庭事情に関することには

触れてはいけないと気がついた。

比奈には、親がいなかつた。

物心を着いた時には施設にて、母親代わりの施設員と同世代の子供たちと幼少期を過ごしていた。

「ただいま

家に帰った遊衣はインターネットでベイズ・プロモーションのサイトへアクセスした。

ベイズ・プロモーションは比奈が所属するフードロイドのマネージメント会社だ。

自分のフードロイドの顔を整形加工する場合、簡単な整形で印象が大きく変わるようであれば報酬は大きくモデルになつたことがバレるリスクは小さい。

遊衣はここ最近ベイズ社のサイト内にある整形シミコマーションで、どう加工すればコストパフォーマンスが高いのか試していた。

しかし自分の顔についての判断は難しく、整形シミコマーションの結果を比奈に何度も見せたが、何度も見せても「すぐバレる」としか言わなかつた。

遊衣がしばらぐシノコレーションを繰り返していると、悠久から電話がかかってきた。

「あのさ、俺今日考えてみたんだよ

「なにを?」

「比奈のこと。なんでアイジがドナーやったかって

「うん……」

「アイツって確かに施設で育つたって言つてたよな?」

「うん……」

「ドナーやつたのつて、ひょつとこで金がないから?」

「アタシも聞いたことないから分からないけど……多分そうなんだと思う」

「比奈ってわ、親いないのに契約のときの保護者欄じりしたんだわい?」

「ネットで見た話だけど、マネージメント会社は高校生のドナーが欲しいから適当に自分で書いたサインでも審査通りじこよ」

「へー。遊衣もドナーに興味あるとか言つてたけど、その方法でやるの?」

「うん。 やる気と思つてる。 でも比奈が反対すんのよ」

「アイツ自分がやつてんのに、なんで?」

「比奈とアタシじゃ環境が違つとかつて言われたけど……」

「なるほどな」

「でもさ、そんな」と言われたらよけいやろうかつて……アタシもやらないこと比奈が独りぼっちになつてくみたいでさ……」

比奈がドナーになつてから、遊衣は彼女だけが徐々に皆とは違つ人生を歩み出していくよつた気がしていった。

いや、比奈は生まれた時から皆とはちよつと違つていたのだ。

しかし遊衣はそんな彼女を、普通の家庭で育つた皆と同じようなレールの上に戻したかった。

遊衣も多少レールを外れることには興味があつたが、あまりに大きく外れた人生は先行きが見えず不安に思えてならなかつた。

翌日、比奈は学校を遅刻して3限目の途中で教室へと入ってきた。

「アンタが遅刻なんてどうしたの？どうか具合悪いとか……？」

休み時間、遊衣は不安そうに比奈の顔を覗き込んだ。

「ううん……寝付きが悪かっただけ……」

そう詰つ比奈の様子は、いつもと違つていた。

「うそだ、比奈おかしいよ。アタシに隠さなくつたつていいじやない」

しかし出来は心にありますといつ感じで、何も返事をしなかつた。

「比奈一ちなんどござひしたのよひー。」

目を伏せている比奈の視界に入るよう、遊衣はしゃがみ込んで言った。

「.....うるさい！.....1人にしてよ.....」

「……比奈……」

「……いつもワタシとばかりいて……他に友達いないの？」

そんなひどい言葉を浴びせられたのは初めてだつた。

遊衣と比奈は中学2年のときに知り合った。

施設から通つてることが知られた比奈は、イジメを受けていた。

遊衣はその頃、比奈にイジメをしていた女子グループのメンバーの1人だった。

しかし遊衣はイジメには加担せず、あるときグループの女子たちからそのことで責め立てられた。

“踏み絵”と称して、遊衣はメンバーたちから比奈の描いた絵を踏むように命じられた。

「一番好きな人」というテーマで描かれたその絵は、両親のいな比奈が描いた母親のよつた優しい笑顔の女性だった。

必死に抵抗する比奈をメンバー3人が取り押さえ、遊衣は絵を踏むようにはやし立てられた。

しばらく悩んだ遊衣は、メンバーたちに土下座をして許しを請つた。

そして絵の代わりに頭を踏ませると言われた遊衣は、言われるままに頭を差し出した。

その日から、2人は力を合わせてイジメと闘つた。

休み時間や昼休みは2人だけで教室から離れたところで過ごした。

陰口を囁かれたり、机にガムをくつつけられたり、どこからかゴミを投げられたり、執拗な嫌がらせは長く続いたが、なんとか2人で乗り切った。

やがて高校受験の季節がやってきた。

比奈の口からは言わなかつたが、彼女がランクを落として遊衣と同じ高校を受験したことはわかつっていた。

そのとき遊衣は、血の繋がつた家族のいない比奈と、本当の家族のような絆が結ばれていると実感した。

「……いつもワタシとばかりいて……他に友達いないの？」

どんな逆境でも人への気遣いを忘れない比奈だったからこそ、そのセリフは遊衣の胸に深く突き刺さつた。

その日2人が校内で話すことなく、比奈は1人でアパートへ帰つて行つた。

比奈は中学卒業と同時に施設を出て、アパートで1人暮らしをしていた。

中学の頃から株のトレードやネットビジネスでお金を稼いでいた比奈は、施設の園長を説得してアパートに住み始めた。

それでも生活は苦しいに決まっている。

ランクの高い高校であれば奨学金の支給もあったが、それを捨ててまで比奈は遊衣と一緒に高校生活を送ることを選んだのだ。

「遊衣ー」

2人の様子を見ていた悠人が、教室を出ようとしている遊衣に声をかけた。

「比奈、いつたいどうしたんだよ？」

「アタシもわからない。比奈があんなふうに言つなんて……」

「体調が悪いとかつていうよりも、まるで別人みたいな……」

「うん……」

「鬱病の前兆とかかもしれないぜ？側にいてやつたほうがいいんじゃないか？」

「でも、また怒らせるだけな気がするし……」

「じゃあ……俺もついてやるから、一緒にあいつん家行ってみようよ」

遊衣の案内で、2人は比奈のアパートへ向かつた。

「遊衣は比奈のアパートまで行つたことがあるの？」

「うん、でもあんまり部屋に入つたことはないの」

「おまえらあんなに仲いいのに？」

「比奈は自分の部屋見られるの好きじゃないみたいから……」

突然、悠人が立ち止まって遊衣を手で制した。

「あれ、あそこ」

「……比奈？」

悠人の見る方向には、2人組みの若い男と話している比奈の姿が見えた。

しばらく様子を伺つていると、比奈はその男たちについて歩き出した。

悠人たちがその後を追つていくと、男たちと比奈はホテルへ入つ

ていった。

「遊衣、ここで待つてろ」

そう言つと悠人は先にホテルまで走つていったが、心配になつた遊衣はソロリソロリと歩き出し、結局ホテルの入り口で口論している悠人と合流した。

「……梨乃のファンかもしけないが、こいつは梨乃じゃなくて人間なんだ！」

悠人が声を荒げていた。

すると、悠人の背後から遊衣が恐る恐る言つた。

「あの……高校生とホテル入つたりしたら捕まるんじゃ……」

それを聞いた男たちはあきらめた様子で、文句を言いながらもその場を後にした。

「比奈……アンタなにしようとしてたの？」

遊衣が聞いた。

「ほんばん」

「本番？アンタ自分の身体は絶対売らないって言ってたじゃない！ いつたいどうしたの？！」

「……も……なれた……」

「慣れた？ 慣れたってどうにつけと？！」

遊衣が混乱していると、悠人が言つた。

「これって……逆行シンクロってやつじや……」

逆行シンクロ現象

逆行シンクロ現象

フードロイドの細胞ドナーとなつた者が、やがてフードロイドのように記憶や感情などを失つてしまつという現象。

科学的・医学的根拠はなく、都市伝説のように噂が囁かれていた。

双子の片方が痛みを感じると、もう一人も似た痛みを感じる。

これと同じように全く同じ細胞を持つフードロイドたちとそのドナーは魂のようなものが繋がっていて、フードロイドの数が増える

モビリナーは人間の心を失いつぶれている。

そして逆行シンクロ現象に陥ったドナーの多くは、半年以内に自殺しているとの噂がネット上で広まっていた。

「…………あつ…………んべつ…………んん…………」

比奈が苦痛とも快樂ともとれないと吐息を漏らした。

逆行シンクロ現象には、記憶などのように徐々にシンクロしていくものと、苦痛や快樂などのように瞬時にシンクロ現象が表れるものがある。

「遊衣、これ持つて」

悠人は比奈のカバンを遊衣に持たせ、比奈を背中に負ふおうとした。

「比奈ーちゃんとかまるんだー！」

しかし負ふおうも、比奈がつかまるつとしないので負ふえなかつた。

複数のフードロイドが同時に強い刺激を感じているときなどは、それらのシンクロ情報がいつぺんに流れ込んでくるドナーの精神はパンク状態となる。

また苦痛や快樂などのシンクロが継続すると、一時的にシンクロ率が高くなりより強い刺激や感情を感じている側に他の者が同調する。

つまりフードロイドのいづれかが強い刺激を長時間受け続けると、ドナーはそれに同調して一時的にフードロイドと同じように記憶や感情、運動性能を司る脳の働きが鈍くなるのである。

そしてそのときのドナーの姿は、近い将来に行き着く先を予告していた。

負ふうことをあきらめた悠人は、比奈を遊衣に預けてタクシーを止めに行つた。

しばらく待つていると、遊衣の前に悠人を乗せたタクシーが止まつた。

「遊衣、比奈を乗せるぞ」

そう言つと悠人はタクシーから一旦降り、遊衣と一緒に比奈を引きずるようにしてタクシーに乗せた。

「その子、大丈夫なの？」

運転手が悠人に尋ねた。

「ちょっと具合悪いみたいで……」

「そしたら近くの病院？」

「あ……」

悠人は行き先のことを考えていなかつた。

比奈の部屋へ連れて行こうとも思つたが、あまりにも比奈の症状が重そうだったので病院へ連れていふことを選んだ。

「遊衣、とりあえず病院でいいよな？」

比奈の場合、家族がいないことやフードロイド契約のことなどがあり、病院へ連れて行つて問題がないかを悠人は心配して聞いた。

「うん、問題ないとと思つ」

タクシーの運転手は2人の会話を聞き、コントロールパネルで最短距離の総合病院を指定した。

「料金は、おおよそ1250円。距離は、おおよそ2・5キロ。所要時間は、おおよそ15分」

スピー カーからの声に続き、運転手が言つた。

「「」でいいかい？」

「はい、お願ひします！」

そう言つと運転手は、目的地決定ボタンをクリックしてタクシーを病院に向けて出発させた。

病院に到着すると悠人は料金を支払い、比奈を胸の前に抱えて院内へと入つて行つた。

「あのー急患ですー」の子診でもらえますかー！」

比奈の様子を見た看護婦は、急いで応援のスタッフをホールした。

3人のスタッフが担架を持つて駆けつけると、悠人は力の抜けた比奈をそこへそつと置いた。

医者らしき人物が、担架に乗せたその場で比奈の診察を始めた。

「きみが付き添い？」

「はい、そうです」

「なにがあつたの？」

「いや、突然こんなふうになつたみたいで……この子フードロイドの細胞ドナーやってるんです」

悠人には正直に言つほか、術がなかつた。

「ああ、アレか……逆行シンクロ……」

「そうです、多分逆行シンクロ現象じゃないかって……」

「よし、まず脳神経のほうに連れてこい」

比奈を乗せた担架は、スタッフの手によってエレベーターのほうへと連れて行かれた。

「先生がそんなに心配ないって言つてたし、あちらで書類を書いて待つてもらえますか?」

悠人は看護婦にうながされ、待合室で3人分の荷物を見張つていた遊衣と合流した。

「悠人!」

「心配ないって。いま上のほうで脳の検査受けてるみたい。それでこれ……」

悠人はそう言つて、遊衣に書類を見せた。

「比奈の場合いろいろと問題あるから、今回はアタシの名前と保険証使おうと思つの」

「ああ、悪いけど俺には無理だから頼むわ」

書類を書いたあと、2人は1時間ほど待合室で待っていた。

「番号札82番でお待ちの方、総合窓口までお越しください」

スピーカーから声が流れた。

「悠人、アタシたちだよ」

腕組みをしたまま眠っていた悠人を揺すって起こすと、2人は窓口まで行つた。

「中村遊衣さんの付き添いの方ですね？」

「あ……はい」

遊衣は自分の名前にしてあつたことを忘れ、一瞬考えてから返事をした。

「5階の脳神経科まで行つて、そこでこの番号札を出してくください」

2人が脳神経科まで行き番号札を渡すと、診察室へと通された。

「付き添いの方？」

「はい」

「えーとね……まづ結果から言つと、患者は精神疾患だと思われます」

「精神疾患？逆行シンクロじゃないんですか？」

「俗に言われている逆行シンクロという現象は、医学的には証明されていません。逆行シンクロという現象によつて患者が精神疾患と同様の症状に陥つているのかもしれないが、なぜ精神疾患のような症状が見受けられるのかまでは検査ではハッキリしないんです」

少し間をおいて、医師は話を続けた。

「ただね、正直なところ私個人としては気にはなつてゐるんです。ここにも細胞ドナーをやつたという患者が何人か運び込まれてゐる。しかし我々ではどうしようもできないんだよ」

「前來たつていう患者さんは、どうなつたんですか？」

「しばらくすると何事もなかつたみたいにして帰つて行つたよ。ここがまた厄介なところなんだが、一時的な逆行シンクロで症状があらわれてゐる場合は、人工生命体の状態が落ち着いたらその症状が治まるんだ。だからよけい病気などと認められにくい」

そこまで言つと、医師は我にかえつたかのように一言付け加えた。

「まあこれは、私の個人的見解ですが……」

「遊衣、悠人……」

奥の部屋から出てきた比奈は、びつやらいつもの彼女に戻つていつようだつた。

「……比奈、もう大丈夫なの？」

遊衣は比奈の乱暴な言葉が忘れられず、恐る恐る声をかけた。

「……うん、大丈夫」

3人が病院のロビーまで行くと、比奈が言つた。

「ちよつと待つて、ワタシ外で電話してくるから」

そう言つと比奈は玄関前まで行つて携帯から電話をかけた。

しばらくすると、比奈は受付に寄つてから2人のもとへ戻つてき
た。

「2人とも、今日は迷惑かけてごめんなさい。遊衣、名前貸して
くれたんだね。お金はもう払つてあるから心配しなくていいよ」

そこまで言つと、比奈は手にしていた診療申込書の裏にケータイ
でタクシーチケットをタンニングプリントした。

「それ今日中なら1万円まで使えるから、悪いけど2人はタクシ
ーで帰つて」

比奈はそう言つて、タクシーチケットを悠人に手渡した。

「比奈、オマエはどうすんだよ？」

「ワタシはちょっと行くところあって、ここまで迎えが来るから
大丈夫」

遊衣は比奈に聞きたいことがいっぱいあつたが、怖ぞと氣まずか
で口を開けなかつた。

「じゃあ、俺たち行くわ」

遊衣は悠人がいろいろ聞いてくれると思っていたので、その言葉
を聞いて残念に思つた。

病院前にはタクシーが並んでいたので、2人はすぐに乗ることが
できた。

「どこまで？」

「すいませんけど、いったん隣のコンビニで止まつてもらえます
か？」

悠人がそう言つた。

「ああ、いいよ」

タクシーがコンビニの駐車場に停車すると、悠人は車内から鉄柵の向こうに見える病院の正面玄関を注視した。

「悠人、どうしたの？」

遊衣も薄々勘付いてはいたが、念のために聞いてみた。

「ああ、誰が比奈を迎えて来るのかと思って。アイツ聞いてもぜつてえ言わないだろうからな」

「うん、アタシもビニに行くのか気になつてたの」

「運転手さん、車を追つてつて言つたらやつてもせうますか？」

「ああ、いいけじつまく追えるかどつかは保証しないよ」

しばらくすると正面玄関前に大型のバンが止まり、すぐに比奈が玄関から出てきて後部座席へと乗り込んだ。

「比奈が所属してゐる事務所の車だ。悠人どつする？」

「運転手さん、あのベイズ・プロモーションで書いてあるバンの後を追つてもらひますか？」

「ああ、いいよ」

タクシーはバンが正門から出ると同時に、コンビニの駐車場をあとにした。

「多分事務所に打ち合わせに行くとかじゃないの？」

「そうかもしないけど、せっかく待ったんだから追つてみようぜ」

バンは15分ほど走って、ビルの地下駐車場に入つて行つた。

「運転手さん、ここでいいです」

「悠人、チケットは使わなくいい。アタシが出すから

「そうか、じゃあ悪いけど頼むよ」

2人はタクシーから降りてビルの入り口を少し離れたところから見張つた。

「どうあるの？」

「どうじょうか……」

悠人はしばらく考えてから言つた。

「多分もう地下から直接上の階に行つてると思つから、ビルの何階なのか見ておこう」

2人はビルの入り口へと歩いて行つた。

1階の入り口横には各フロアの案内板があつた。

「あれ? ベイズ・プロモーションないけど……」

遊衣が言った。

「ああ、比奈はここに行つたんだ」

悠人が指差した箇所には、ANDROTech Corp. と記されていた。

「ANDROIDTECH?」

「知らないのか?」

「うん」

「ANDROIDTECHのはANDROIDのメーカーだよ」

「ベイズ・プロモーションとは違うの?」

「ああ。普通フードロードやるときはベイズ社みたいなマネージメント会社をとおすんだ。そのあと細胞をとるときとかに比奈もここに来てるのかもしだいけど……検査かなにかで来たんじゃないのかな……」

「じゃあもう安心ひいて。」

「わあな、安心かどうかはわからないうち……ちょっと待つてみて出でこなかつたら帰る」

2人はビルの外で20分ほど待つてみたが、比奈もベイズ社のバ

ンも出てくる気配はなかつたのでタクシーを拾つて帰ることにした。

帰りの車中、遊衣が口を開いた。

「ねえ、悠人。比奈がアタシにさ、他に友達いないのかつて言つたの……あれも逆行シンクロのせいなのかな……？」

「……ああ。多分そうだよ。それとさ、遊衣はほかにも友達いるじゃん。俺は友達じゃないの？」

「ありがとう、とうぜん悠人は大切な友達だよ」

比奈のアパート

翌日、学校に来ていた比奈は、悠人とも遊衣とも挨拶はあらか視線を合わさうともしなかつた。

昼休みになつて、悠人は遊衣を連れて比奈に声をかけてみた。

「比奈、あれから体調はどう？」

「……大丈夫。それと昨日はありがとう」

一呼吸置いて、比奈は続けた。

「でも……2人とも今後一切ワタシには関わらないで」

「比奈……」

「迷惑なの。いまファッショントークの話も来てるし、行動とか付き合つ粗手についてベイズ社から注意されてんのよ」

そこからほんの少し早口で言つた。

「特に遊衣。アンタ、いつまでもワタシにまづかりへついてんじゃないわよ」

そう言つと、比奈は椅子から立ち上がり足早に教室を出て行った。

悠人は、いまにも泣き出しそうな遊衣を人のいない階段の踊り場まで連れて行つた。

「遊衣、きつと本音じゃないよ。なんかどうじょうもない事情があるんだ」

「……比奈、泣いてた……」

「比奈が?」

「わっせ、アタシにじやべつてるときに涙浮かべてたの……」

「……やつぱつ、あいつの本音じゃないんだよ」

「うん……なんかもつと……もつと重要なことを隠してる気がするの……」

「そうだな……俺は、やっぱり逆行シンクロのことが一番怪しいと思つただ……」

昼休みが終わって教室へ戻るとそこに比奈の姿はなく、教室に入ってきた先生が早退したことを伝えた。

放課後、悠人と遊衣は校内のインターネットコーナーで調べものをしていた。

「遊衣、これ見て」

悠人が見せたモニターには次のように書かれていた。

フードロイドドナーになつた女の子が、いつも人に囲まれてみるとたいだと言つっていました。フードロイドが増えると、常に人と接している個体がいるようになるので、シンクロしやすい人は四六時中人の気配を感じ続けるようになるんだと思います。

「きっと比奈もこの症状で悩んでんじゃないかな?だからあんなこと言つたんだよ」

悠人が遊衣の傷ついた心を少しでも癒そうと思いついた。

「でもさ、比奈いろんなんこと知ってるのになんでこんな危険なことやつたんだる……？」

「多分それだけ金に困つてたんじゃないかな。アイツ人に金借りたりするの嫌いだし……」

「アタシに言つてくれたら良かつたのに……」

比奈が頼つてくれなかつたことに遊衣は寂しさを感じているようだつた。

「それにさ、誰でもシンクロするわけじゃないんだよ。だから比奈は自分がシンクロし難いと思ってやつたのかもしれない」

「そんなんのつてさ、ドナーになるときに性格とか体质とかのテストしないのかな？」

「言われてみれば……遊衣にしかやることに気がついたな

「まるでアタシが悠人より頭悪いみたいな言い方じやん！」

そう言つ遊衣の顔には、少しだけ笑顔が戻つていた。

「…………比奈だけどさ、またシンクロ起こして早退したんだつたら、ヤバくないか……？」

悠人がふと気がついたように言つた。

「そう言えば……また昨日みたいになつてたら……」

「……遊衣、今日こそ比奈のアパートに行つてみよつ」

2人は学校をあとにし、比奈のアパートへと向かつた。

「へー、アイツ本当に一人で住んでんだあ……」

遊衣に案内されたそこには、いかにも単身者向けという感じの古アパートが建つていた。

「悠人、こっちだよ」

遊衣は玄関ドアが並ぶ方へ行こうとする悠人に、各部屋の窓が並ぶ方へ来るよう手招きした。

「比奈がいるときはカーテンが開いてて窓際にバッグがかかっているの」

遊衣は2階の一一番手前の部屋を指差しながら行つた。

「おまえよく知つてんなあ

「たまにしか来ないけど、外で待つてることが多いから……」

「カーテンは微妙だけどバッグはかかつてゐただな」

磨りガラス越しに、カーテンが半分ほど閉まっているのと、バッグがかかっていることが確認できた。

2人はしばらくの間人影が見えないか待つてみたが、なにも変化はなかつた。

「玄関のほう行つてみよ」

遊衣がそう言つと、2人は各部屋のドアが並ぶ方へ歩いて行き、階段を上がつて行つた。

2階に上がつて右側へ。

道路側の端が比奈の部屋だった。

遊衣は人差し指を鼻先に当てて、悠人に物音をたてないよう指示した。

しばらく静かにして、部屋から物音などが聞こえてこないか神経を集中してみる。

すると、誰かが階段をゆっくりと上がつてくる物音が近づいてきた。

先生

2人が階段のほうを見ていると、ゆっくりと上がってきたのは年配の女性だった。

悠人と遊衣は、顔を見合させて安堵の表情を浮かべた。

「あんたたち、比奈のお友達？」

無関係だと思っていた2人は、女性の言葉にギョッとした。

「あ、アタシ、中村遊衣つていいます。比奈の友達です」

「俺は石川悠人です」

「遊衣ちゃん……知ってるわ。私は矢野美津枝よ」

その女性は遊衣のことを知っているようだったが、遊衣は名前を聞いても思い当たる人物が浮かばなかつた。

「すいません……どこかでお会いしますか？」

遊衣が遠慮がちに聞くと、女性はしばらく考えてから答えた。

「園長つて言えば、わかる？」

遊衣の表情が一気に光に照らされたかのように明るく変わつた。

「園長さん！比奈から話は聞いて知っています！」

それは中学2年の、あの運命の日だった。

比奈をイジメていた女子グループからその身を呈し、また自分の立場を捨てて遊衣が比奈の絵を守つたあの日。

「比奈ちゃん、その絵……お母さん？」

「ううん。ワタシはお母さんの顔知らないの……」

「じゃあ、だれの顔？」

「園長さん。ワタシのいる愛育園つてこいつの園長さんだよ」

「へー、すうぐ優しい顔……」

「うん。でも怒るとね、すうぐ怖いんだよ」

「アハハハハハハハツ！」

初めてイタズラつぽく言つた比奈を見た遊衣は思わず大笑いした。

「お母さん……」

比奈はやつ言いながら園長の似顔絵を見つめた。

「やうだよ、その人が比奈ちゃんのお母さんなんだよ」

「やつん、違ひ。園長さんはみんなのお母さん。ワタシ以外にも
いっぱい子供がいるから、独占しちゃダメなんだ……」

しかし比奈は、自分だけの母親を欲して止まなかつた。

そしてその燻つたままの独占欲が、その後の彼女の運命を大きく
変えることになつた。

「みんな比奈ちゃんを欲しくてたまらないんだよ。だから、お願
い！」

細胞ドナーにスカウトされ迷つていた時、その一言が比奈の心を
大きく揺さぶつた。

直接会いたいといつファンへの要望も、最初はボランティアで応
えていた。

しかし何度も繰り返す「ちこ、彼らは比奈のことが欲しいのでは
なく、自分の頭に思い描く梨乃を欲しがつていてるのだと理解した。

射精した途端に態度が変わる者や、約束を破つて乱暴しようとする
者もいた。

経験を重ねる”ことに比奈は、自分が愛を欲しがる気持ちと彼らが比奈に望むものとは違つことを理解していった。

やがて比奈はビジネスとして割り切り、金と引き換えに彼らを満足させる演技を提供するようになつていった。

「悠人、比奈がいた施設の園長さんだよ」

遊衣が言った。

「はじめまして、愛育園の園長です。比奈がいつもお世話になつています」

悠人が比奈の生い立ちを知らない可能性も考えて施設名を出さず、にいたが、このとき園長は悠人も親しい友達なのだと想い改めて頭を下げた。

「あ、いや……」少しあお世話なんつてます」

悠人は戸惑いながら頭を下げた。

「今日は比奈いないの？」

園長が聞くと、悠人が答えた。

「あ、いえ、俺たちもこま来たとこりで……」

「ああ、そうなの」

「実は俺たち、いまちょっと比奈とケンカして……でもアイツ、体調悪いみたいだから様子みよつかと思つて……」

詰まりながら悠人が言つと、園長は事情を察したかのように言つた。

「ありがとう、比奈のこと心配になつて見に来てくれたのね。大丈夫よ。私がついてるから、一緒に部屋に入りましょ」

外から様子を伺つ以外にビリしそうもなかつた2人には、園長の言葉はまさに渡りに船だつた。

カチッ……カチッ、カチッ……

園長が部屋のチャイムを鳴らさうとボタンを押すが、電池が切れているようで耳を澄ましてもチャイムの音は聞こえてこなかつた。

「比奈！ いないの？」

園長がドアに向かつて呼びかけた。

しばらく待つてみると、物音一つ聞こえてこなかつた。

「留守かしづ……」

「いえ、部屋にカバンがかかってたらきっと中にいるはずです」

遊衣がそう言つと、今度は悠人が言つた。

「園長さん、電話してみましようよ」

悠人はケータイを出して否通知設定にしたうえで比奈の番号に発信し、コール音が鳴つてることを確認した。

「俺たちじゃ出でくれないと思つんで……」

そう言いながら、悠人は園長にケータイを手渡した。

「出ないわ……」

園長はケータイを耳に当てたまま2人に言つた。

「あつー！比奈？私よ。園長先生よ」

「…………して…………つと…………」

「比奈？なに言つてるの？こまあなたの部屋の前にいるからダメ開けてくれる？」

「…………やつ…………」

「お友達も一緒に。あなたのお友達が心配して来てくれているの

「……」

園長はケータイから耳を離すと、悠人に言った。

「様子がおかしいわ。なにを言つてこのかよくわからないの。あなた出てみてくれる?」

悠人は園長からケータイを受け取った。

「比奈、俺だよ。悠人だ」

「……と……ゆづ……と」

「そう、勝手に来たことは謝るから、とつあえず部屋にいるなう出てきてくれないか?」

「……ゆづと……きて……」

「ああ、だからその、まづドアを……」

「……いい……あ……い……」

「やっぱ……またシンクロしてん……」

悠人は小声で遊衣に言った。

次の瞬間、ケータイと部屋の中から同時に悲鳴が聞こえてきた。

「いやッ！－イタイ！－イタイイタイイタイ！－！－！」

涙声でやう叫んでいる。

「悠人くん……中に誰かいるの？？」

園長が聞いた。

「あ、いえ……」

「比奈つ……」

園長がそう叫びながらドアノブを引っ張ると、ドアが開いた。もともと鍵はかかっていなかったようだ。

園長は駆け足で部屋に入つて行き、悠人と遊衣もそれに続いた。

「比奈つ……シッカリしなさい……どうしたの比奈つ……！」

1人で悶え苦しむ比奈に園長が声をかける。

「ゲホッ、ゲホッ……カハッ……ング……ツク、ング……」

比奈は咳き込んだあと、苦しそうに痙攣を起こしていた。

全身、特に頭をガクガクと震わせている。

園長は比奈が着ていた制服のボタンを外し、首の後に手を当てて気道の確保に努めた。

「比奈つ……」

大声で呼ぶ2人を園長が手をかざして制した。

「大丈夫。すぐに収まるわ。ひきつけを起こしているときは大声を出さないほうがいいの」

園長は慣れた感じで額に手を当て体温を確認した。

「おかしいわね、こんな歳になつてひきつけを起こすなんて……」

比奈は眠っているようだつた。それを確認して悠人は口を開いた。

「園長さん、実は……」

「悠人、ダメだつて……」

悠人が言いかけると、遊衣が割つて入つた。

「なにを隠しているの？私は比奈の母親も同然よ。子供同士の隠し事はけつこう。でも命に関わるようなことだけは絶対に隠しちゃダメ！2人が知っていること、全部私に話してちょうだい」

悠人と遊衣はアイコンタクトで園長に話すことに合意した。

「園長さん……フードロイドつて、わかりますか？」

悠人がゆつくつと話しあじめた。

「……わかります」

園長はそれだけで事情を察したようで、動搖を抑えようとしていた。

「比奈が、それを？」

「はい、怒らずに聞いてください。比奈はフードロイドの細胞ドナーになつたんです」

悠人はそこで一息ついた。

「逆行シンクロ現象についてはご存知でしょうか？」

「ええ。難しいことはわからないけど、ニュースで聞いたことがあるわ」

「フードロイドが感じた刺激やストレスが、ドナーにも流れ込んでくるんです。特に比奈の場合は作られているフードロイドの数が多いから、常に自分の身体で感じる以外の感覚や原始的な感情を感じているんです」

「眠つていなくともいつも夢を見ているみたいな……それも強い刺激やストレスを感じていることが多いんです」

悠人の説明に遊衣が付け加えた。

「それでこの病気は、治るものなの？」

「先日病院へ行つてきましたが、病院では治療できないと言われました。現段階では医学的に解明されていないんです」

「治らなことこのことなの?」

「わかりませんが、こま俺が考へていふことはフードロードのメーカーに比奈を診ても「治ら」とです。そこならなんとかできるかもしない」

「それなら、手遅れにならないうちにま連れていきましょ。あなたち、そのメーカーの連絡先は知つてこるの?」

園長の決断は早かつた。

「連絡先は調べないとわかりませんが、場所はここからそんなに遠くありません」

「じゃあ悠久くん、タクシーを呼んでけよ」

園長は相手の意向に合わせず、比奈を連れて行く気だった。

タクシーが到着し、3人がかりで意識の朦朧とした比奈を乗車させた。

「やつぱり……病院のほうがいいのかしり……

朦朧とした比奈を見て、園長が言った。

「いえ、この状態はシンクロが起きているときだけで、いずれ戻ります。病院へ行つても根本的治療はできません」

悠人は、早く根本的治療をしなくてはいけないことを知っていた。

園長と遊衣には過度の心配をさせてはいけないと気遣つて言わなかつたが、インター ネットコーナーで調べていたときに逆行シンクロ現象の行く末を記した記事を見つけていた。

そしてその内容は、あまりにも残酷な未来を予言していたのだ。

偽装疑惑

ANDROTECH CORP.

ビルのフロアガイドの8～11階にそう記されていた。

これだけのフロアを確保しているのだから、ここには技術的に精通した人物や検査のための設備があるはずだと悠人は考えていた。

「俺、話してくるんでちょっと待っててください」

悠人はそう言つと、1人でビルへと入つて行つた。

そして数分後、「ANDROTECH」の刺繡が入つて いる作業服を着た男2人と一緒に悠人がタクシーへと戻つてきた。

アンドロテックのスタッフは担架を用意しており、比奈を担架に乗せると一足先にビルへと入つて行つた。

「今日は本当は休みらしいんだ。たまたま技術関係の人�이いて、緊急だつて言つたら診てくれるつて」

8階のボタンを押し、エレベーターを待つてゐる間に悠人が2人に説明をした。

3人がエレベーターで8階に着くと、悠人は受付に置いてあるインターフォンで11階に連絡をした。

しばらくすると、部屋の奥からさきほどのスタッフの1人が出てきた。

「今日は僕ら以外誰もいないから、11階まで来てもらひますか」

そのスタッフはそう言いながら、棚のスリッパを3人分並べてくれた。

3人はスタッフについて部屋の奥にある階段を上がり始めた。

「すいませんね、エレベーターは8階にしか止まらなくなつてゐるもんで」

階段を上りながらスタッフは説明した。

11階のフロアは8階とは全く違い、いくつもの部屋に別れてい

た。

スタッフは「研究B」と記されたドアの前で止まり、ケータイを横のリーダーにかざした。

「あ、一応ここは我々以外入っちゃいけない」とになつてゐから内緒つてことで……」

ドアが開き、部屋に入る前に3人に念を押した。

部屋は8畳ほどの広さで、病院の検査室のようだった。

「あの、比奈は……」

園長が聞いた。

「彼女はいま別の部屋で検査を受けています。1人にして検査した方が正確な結果が得られるんで、しばらく待つともうれますか」

「比奈は大丈夫なんですか?」

今度は遊衣が聞いた。

「脳波のほか心拍なんかもとつてますんで、緊急を要するような容態になれば警告音が鳴ります。ただ……」

「ただ、なんですか?」

遊衣が問い合わせる。

「言つていいのかどうか……」

「今日あなたから聞いたことは内緒にします！アタシたち比奈のことが心配なんです。本当のことを教えてください…」

「わかりました。とりあえずいまお茶を入れますから、ちょっと待つてください」

スタッフはそう言つと人数分の折りたたみ椅子を広げ、別の部屋から4人分のお茶を持ってきた。

「申し遅れました。私は沼井といいます。今日の件は社に報告しないので、名刺は出せませんがご勘弁ください」

「はい、この子たちにも他言しないように約束させます」

園長がこたえた。

「それで申し訳ないんですが私も彼女の検査経緯を観察しますんで、先にこの質問用紙に回答してもらつていいですか。お話の続きはあとでいたしますんで」

沼井はそう言つと、お茶と一緒に持つてきた書類を3人の前に差し出した。

「いろいろとプライバシーに関わるような質問も含まれていますが、診療上大切なことですのでできる限り正直に書いてください」

3人は田の前に置かれた用紙に田をやつた。

質問用紙は5枚にわたり、次のような質問が100問ほど並んでいた。

【質問】 ドナーの性格や思考について当てはまるものに をつけよ

【質問】 ドナーのアルコール飲用時の変化について当てはまるものに をつけよ

【質問】 ドナーに当てはまる恐怖症があれば をつけよ

【質問】 ドナーの好き嫌いに関わらず、顕著な反応が見受けられる単語や言葉を答えよ

【質問】 ドナーが比較的敏感だと思われる感覚に をつけよ

【質問】 ドナーの身体のつち特に敏感だと思われる箇所を答えよ

【質問】 ドナーの性体験について体験済みであるものに をつけよ

【質問】 ドナーの処女喪失時期について知り得る限りで答へよ

【質問】 ドナーの性的嗜好について知り得る限りで答へよ

【質問】 ドナーとの性交体験がある場合、生理的特徴などを答えよ

「質問内容については決して相談せずに各人が記憶している範囲だけで答えてください。よろしいですか」

「はい、わかりました」

3人がこたえると、沼井は部屋から出て行った。

「これだけのものが用意してあることは、きっとこれまでにも逆行シンク口が問題になってるんだ……」

悠人が言った。

3人は沼井に言われたとおり、相談することなく黙々と回答を書いていった。

およそ1時間後、沼井が3人の待つ部屋へと帰ってきた。

「すいません、お待たせしました。用紙のほうは全員書き終わりましたか？」

「はい、みんな書き終わりました」

「では拝見させていただきます」

そういうと沼井は、持ってきたノートパソコンと用紙とを見比べ出した。

「んー……みんなんの知つている比奈わんはだいたい一致してい
るんですよねえ……」

「なにかおかしいんですか?」

悠人が聞いた。

「ええ。ドナーの事前調査でベイズ・プロモーションから送られ
てきている比奈さん本人の回答内容とずいぶん違うんですよ」

「それ、見せてもらひたいとつてできないですか?」

「いや、わすがにそれは」「本人との約束をやがるむ」となるので
……」

「その事前調査つてこののは、シンクロのしやすさをみるものな
んですか?」

「まあそれだけではないんですけど、シンクロのしやすさをチョッ
クするところは最も重要な目的の一つです。医学的には認められ
ていないんで、あくまでも当社の独自基準ですが……」

「比奈が書いた結果だと、シンクロのしやすさはどうなつてこる
んですか?」

「シンクロ現象発症率1.6%。充分な合格ラインですね」

「そのデータつて、本当に間違いないんでしょうか?」

「事前調査はマネージメント会社が代行しています。アンドロテ

ックではその報告を受けて審査を進めるので……」

沼井は言葉を濁したが、いわんとしていることは3人にも伝わった。

「つまり、ベイズ社が偽装する余地があると……」

園長が沼井の言わなかつた先を言葉にしたが、沼井はただ黙っていた。

「いくら非公式とはいえ、憶測だけで提携先企業の誹謗中傷をすることはできません。あとは察してください」

なんとか沼井からより詳しい内情を聞き出せないかと3人が頭を巡らせていると、先に沼井が口を開いた。

「それで、さきほどの話の続きですが……」これも非公式であると「うつ」と理解のうえ聞いてください。あと私の個人的見解でもありません。週刊誌やインターネットで噂されていることをお話しるだけです」

沼井は、良心と保身とのジレンマに陥りながら言葉を選んでいるようだった。

「もし逆行シンクロというものが実際に存在した場合、こういった行く末が考えられます。プリントアウトしてきたので」覗ください

やう言ひと、沼井はテーブルの上に一枚の紙をそつと置いた。

行き着く先は

逆行シンクロの行き着く先

シンクロ現象とは、複数の個体が体験や思考を共有し、その個体差を埋めていくことである。

つまり問題となつてゐるフードロイドとそのドナーにシンクロ現象が起これば、フードロイドはより人間らしく、ドナーはより人工生命体らしくなつていふのである。

フードロイドの数が増えれば、当然それら全てを足してその個体数で割つた平均状態へと近づいていくわけだから、ドナーは人間性を失い、高度な知能や感情を持たないフードロイドに近い状態となる。

逆行シンクロとの関連性は裏付けられていないが、細胞ドナーがその後植物状態となつたされる報告がインターネット上の掲示板に多数報告されている。

それは、悠人が学校のインターネットコーナーで見つけた記事だつた。

「比奈が…………比奈が、フードロイドに飲まれていく…………」

遊衣が思わず口走つた。

「なぜ私がこれをお見せしたのか…………わかつてください。彼女との残りの時間を…………」

沼井にはそうアドバイスすることが精一杯だつた。

そのとき、インターフォンが鳴り沼井がとつた。

「…………はい、わかりました」

沼井は受話器を置くと、3人に向かつて言つた。

「アンドロテックの見解といたしましては、逆行シンクロといった現象は確認されておりません。今回は特別に検査を行いましたが、今後ドナー契約のことでなにかあればベース・プロモーションか当社の代表連絡先までお願いします」

それまでとは一変して、冷たい言い方だつた。

「はい…………今日は無理言つて本当にすみませんでした」

悠人がそう言つと、3人は沼井の精一杯の行為と立場を酌み深々と頭を下げた。

「では、比奈さんの具合が良くなつたみたいなので」あらぐ

沼井はやう言つて、比奈のいる部屋へと案内した。

ガチャ……

静かな部屋に、ドアを開ける音が響き渡る。

殺風景なその部屋には、比奈一人がポツンとベッドの上に座つていた。

「先生……なんでみんなここに……？」

比奈は3人がここにいることに驚いた。

「嘉川さん、この方たちがあなたをここに連れてきてくれたんだよ

「なんで……」

「嘉川さんの部屋に行つたら意識が朦朧としていたらしくて、この3人がここに医療施設があるからつて……」

「3人とも……もうワタシには関わらないで……」

「比奈、オマエ自分がどういつ状態なのか……知ってるんだろ?」

比奈が何も答えなかつたので、悠人は少し間を置いて続けた。

「……だから、先生や遊衣と離れてこうとしてるんじゃないのか……？」

悠人には、比奈の意図が手に取るようにわかつていた。

記憶も人間的な感情も無くなり、自由に動くことさえできなくなつた自分を見せたくないのは当然だ。

人知れず自殺することを考えているのかもしれない。

もしくは比奈ではなく、1体のフードロイド梨乃となり生きることをベース・プロモーションと約束しているのかもしれない。

何も言わない比奈に、悠人が続けた。

「俺よりなんでも知ってるオマエが、これからどうなるかを調べていなればすがないじゃん……俺たちもなんとか助けられるように頑張るからぞ……」

悠人は話しているうちに涙が流れてきて、言葉が続かなかつた。

「うるさい！……ワタシは一人で帰るからとつと帰れっ……」

いつも冷静な比奈が、泣きながら叫んだ。

3人とも初めて見る姿で、それはとても比奈とは思えなかつた。

「比奈つーそんなお別れの仕方イヤだつーー比奈がしゃべれなくなつたつて、アタシのこと忘れたつて、アタシ比奈のこと大事にするー比奈は比奈だもんーワードロイドじやないもんーー」

遊衣が比奈に負けないほどの大声で叫んだ。

「お願いだから……3人ともワタシの前から消えてよ……」

「消えるもんかつーー比奈アタシと一生友達だつて誓つたじやないつーーこつちじやーーじつじこお願いだから…………まだ、しゃべれるうちに比奈との思い出話とか…………させてよ…………」

遊衣はそう言い切ると、床に膝をつき泣き崩れた。

「比奈……」

園長は比奈の名を口にすると、ゆっくりと比奈のほうへ向かって歩き始めた。

パンツ……

園長は慣れた手つきで、比奈の頬をぶつた。

「比奈、あんたをぶつのは何年ぶりだらつね……たとえあんたが

私のことを忘れても、私としゃべることができなくなつても、あんたの肉体が生きていればまたこうやつてぶつことができる……」

園長は涙をこらえきれず、比奈に背を向けて続けた。

「そりやあ、私が一番大好きなのは比奈の心だよ。でもさ、人つていうのは悪あがきでもなんでも愛する人を生かしたいもんなの。……形見つて言葉があるだろ？例え愛する人が亡くなつても、その人が身につけていた物とかが残された人にとっちゃあそれがとおつても大事なの。……あんた自分のことばかり考えて、大切な友達の気持ちをぜんつぜん考えてない。私は比奈をそんな子に育てた覚えはないよつ！」

「先生……」

「さ、比奈。お家に帰ろう。今日は私ん家で、お友達と一緒にみんなでご飯食べようよ」

園長が笑顔を作つて言つと、ドアの側に立つていた男が声を上げた。

「ちよ、ちよっと待つてください……沼井、ちよっと……」

騒ぎを聞いて駆けつけていたスタッフたちが、小声で相談を始めた。

しばらくして、沼井が言った。

「あの……申し訳ないんですが、嘉川さんだけここに残つてもうつることは可能でしょうか」

「え……どういふのですか?」

「ここでは研究に協力してくれる被験者を宿泊させられる制度があります。うまく言えませんが……ここにはたくさんの検査設備もあるので……」

「スタッフも2人以上常駐して監視しますから、嘉川さんが寝ぼけて歩いたりしても比較的安全だということです。睡眠中の脳波測定なども行いますし、もしかしたら何か新しい発見があるかもしれません」

沼井に続いて、別のスタッフが言った。

比奈と園長たち3人にも、何を言わんとしているのが分かった。

「まだ……望みがあるってことですか?」

悠人が聞いた。

「わかりません。研究というのは未知の可能性を探ることです。結果が見えていたら、それは研究ではありません。ただ……」

そのスタッフは、しばらく間を置いて続けた。

「ただ、研究に行き着きたい目的地がある場合、我々研究者は必死になつてその目的地への道を探します」

しばらく考え、園長が言った。

「お願いします。どうか比奈を……私の子を、お願いします」

園長が保護者となつて同意書を書き、比奈はアンドロテック社に預けられた。

それはただ彼女の身柄が預けられただけではなく、彼女の未来もそこに預けられることを意味していた。

小さな戦士

翌日、悠人は学校を休んでベイズ・プロモーションへと向かつた。

ベイズ社に着いた悠人が受付を済ませて待つていると、大柄な男がやってきた。

「梨乃を担当している大曾根といいます」

「うなぎ乗つたが、名刺は出さなかつた。」

「俺は、比奈の……嘉川比奈の友達で、石川悠人といいます」

「それで？」

「あの、比奈のフードロイド、梨乃を回収してほしいんです」

悠人は一晩考え、フードロイドを回収して無くしてしまえば逆行シンクロが起きないと気がついた。

しかしそれは、無理を承知のうえでの交渉だつた。

「回収？」

「はい。もう知つてゐるかと思ひますが、比奈には逆行シンクロの症状があらわれています。だから……」

「結論から申し上げますと、残念ながら回収といったことは無理です」

大曾根は悠人が言い終わる前に畳み掛けるように言つた。

「……もし、もし比奈がおかしくなつたらどうするんですか！」

「先ほど逆行シンクロとおっしゃいましたが、そんな医学用語は存在しません。都市伝説のようなものです。ただ……」

大曾根は言葉を選んでしゃべっているようだつた。

「ただ、ドナーには思春期の女性も多い。だから精神的に不安定な方もいます。もしなにか不審な行動などがあれば、私に連絡をください。マネージメントの立場からできるだけのケアはいたします。今日この本人は？」

大曾根は比奈がアンドロテック社にいることは知らないようだった。

「今日は……今日は俺、学校行つてないんでわかりません……」

「そうですか。では最近彼女となにがあつたんですか？」

「あきらかに様子がおかしいんです。言動とかが逆行シンクロ現象とピッタリ一致するんですよ」

「あきらじも言つたように、そんなものは医学的に証明されていないうだの噂です」

「でも細胞ドナー希望者に、シンクロしやすいかどうかのテストをしてるじゃないですかっ！」

「適性テストのことですか？……あれは、フードロイドが商品として成立するかどうか、市場の要望に合つかなどをみるためにあるんです。露骨な言い方は避けたいので、これで解かってもらえますね？」

「もし比奈が……もし彼女が死んだり記憶や感情を無くしたら、

「この会社も困るんじゃないですか？ファンクラブとかホームページとか……」

「そうですね。当社も見込み利益というものがありますから、彼女に万が一のことがあった場合にはその補填としてフードロイドの市場範囲の拡大ができることを契約書に記しています」

「そんな……そんな契約書本当にあるんですか？」

「良かつたらお見せしましょつか？ちゃんと保護者の方のサインもいただいていますよ」

悠人は、遊衣が保護者欄を偽造して契約できると言っていたのを思い出した。

契約書のことを突っ込めば、かえって不利になるかも知れないと思いそれ以上何も言えなかつた。

しばらく沈黙が続いたあと、大曾根が口を開いた。

「私もこれ以上トラブルを起こされるのであれば、訴訟することも考えなくてはいけません。これまでにも嘉川さんが契約に反して個人的にファンへの有償サービスを行っているという噂を聞いている。きみにしても、もし根拠もなく逆行シンクロ現象などという噂を広めるのであれば、風評被害で訴えざるを得ない」

完敗だった。

数々のフードロイド事業を手掛けているベイズ社に高校生の悠人が勝てるはずがなかったのだ。

そもそもフードロイド事業は政府が促進して実現したという経緯がある。

裁判になつたところで、勝てる見込みはとつてい考えられなかつた。

絶望の淵に立つた悠人はベイズ社を出たあと、学校へ行かず1人で街を歩いていた。

これからどうすればいいのか、どこへ行けばいいのか、考えがまとまらずただ焦燥感だけがつるばかりだった。

「悠人くん！」

突然呼ばれ、悠人は辺りをキョロキョロと見渡した。

「園長さん！」

園長が優しく微笑みながら、悠人に近づいてきた。

「悠人くん、学校はどうしたの？」

「……」

悠人は何もいわず、うつむいたますすり泣いていた。

「悠人くん……」

園長は彼を優しく抱きしめた。

「大丈夫。比奈はきっと元気になつて帰つてくるわ……」

それはまるで悠人に言いながら、自分にも言い聞かせていくつひみつをつぶやいていた。

だつた。

その日の夜、園長の提案で悠人と遊衣は愛育園にいた。

「カレーの日に来るだなんて、2人とも運がいいわね」

悠人と遊衣は、園長のほか2人の先生、11人の子供たちと夕飯を一緒に食べることになった。

「昨日は魚だつたんだよーお兄ちゃんたちほんとにラッキーだよー！」

「ケイはほととど食べなかつたもんなー！」

「あらそりなのケイ？魚もちゃんと食べなさいって前あれだけ言つたのにー！」

「」いつ園長先生いなかつたらほんとんど残すんだぜー。」

「ゴーライチーおまえが野菜食べてないのだつてバラすぞー。」

「もつぱりてんじやんー。」

「」ハシー静かにしなさーつーーこれまでの分は大田にみるから、これからはせやんと食べるのよー。」

愛育園で寝泊つしてこる子供の多くはまだ小学生だった。

「」めんなさいね。騒がし過ぎて落ち着かないかもしけないけど、ゆつくり食べてね

「あ、あつがとうござります」

夕食後、悠人と遊衣は食器洗いを買って出た。

「いいな、比奈は」

遊衣が食器を洗いながら言った。

「なにが?」

「あんな優しい人と一緒にいたられてさ……アタシなんて出合つて間もないのに、もつ本当のお母さんみたいな気がするもん」

「ああ、やうだな……」

悠人は園長に抱きしめられたことを思い返していた。

「でも、こんなにいいところなのになんで比奈はわざわざアパートに住むことにしたんだが……」

「あいつはさ、強いけど怖がりなんだよ」

悠人の言つ意味が、遊衣にはいまいち理解できなかつた。

「どうこう」と、

「……あいつさ、自分の記憶や感情が消えてくつたのがわかつたから遊衣から離れようとしたんだよ。ここを出たのも一緒に大人になつたら嫌でも園長さんと別れなきやいけないだろ？多分高校入る頃んなつてそのことを考え出したんだよ。別れのシーンが頭を過ぎるようになつたら、そのときが来るのが怖いから早く済ませてしまおうつてことだ」

「うーん……？アタシにはよくわかんないなあ……好きな人とは一緒にいれる限り側にいたつて思つよ？」

「まあ、あくまでも俺の推測だから違つてるのかもな。単純に自立したかったのかもしれないし、他の子供のこと考えて園を出ようと思つたのかもしれないし……」

園長は泊まつていいくことを勧めていたが、2人は食器を洗い終え

ると家に帰ることにした。

「時間遅いから、家の前まで送つてくよ」

悠人が歩きながら言った。

「うん、ありがと」

お互い不安と寂しさで心が張り裂けそうだった。

愛育園に泊まつていきたかつたが、悠人が言った。

「俺たちも、覚悟しなきゃいけない。比奈がオマエにあれだけのこと言つまでは相当の葛藤があつたはずだ。アイツは一番大切な友達と決別する覚悟をしていたんだよ。いつも誰かが側にいて、悲しさや寂しさをフォローしてくれると思つてたら大間違いだ。人間いつかは孤独になるときがくる。だから今日は家に帰ろう。ここで甘えてちゃ、もし比奈がいなくなつたとき……俺たちは耐えられないかもしない……」

「悠人、今日だけのお願いがあるの」

家の近くまで来ると、遊衣が足を止めて言った。

「なに?」

「抱いてほしい……」

「え？」

「お願い、変な意味じゃないの……さつき悠人が甘えてちゃいけないって言つていたけど……アタシいまともツラい……胸が張り裂けそうなくらいに……」

悠人は園長に抱かれたときを思い出しながら、同じように遊衣を優しく包んだ。

「……ありがとう、悠人……」

悠人の腕の中で、遊衣は少し落ち着いたような声で言つた。

戦略

翌日、再び園長から悠人と遊衣に連絡があつた。

その日の夜、園長室には園長、悠人、遊衣、そして沼井の姿があつた。

「まず最初にみなさんに宣誓します。今日は、正直に話す覚悟できました」

「沼井さん……」

「まず……検査の結果ですが、残念なことに彼女はすでに脳萎縮の兆候が見受けられます」

「脳……萎縮？」

「フードロイドは極めて原始的な脳しか持っていないません。つまり逆に言えば、人間が持つ前頭葉、側頭葉、頭頂葉、後頭葉、小脳などの大部分を持つていないとのことです」

沼井は、脳の図解を指差しながら説明を続けた。

「シンクロが起ると、嘉川さんの思考は多数派のフードロイドに近いものになります。つまりそれだけ脳の大部分を使わなくなるということです。この状態が続くと、使われていない脳の細胞は死滅していきます」

沼井はいきなり厳しい現実を突きつけてきた。

「もう……手遅れなんですか？」

「いま私たちは、少しでも脳萎縮のスピードを抑えようとスタッフが交代で嘉川さんに話しかけるなどしています。人間らしいコミュニケーションをとることで、フードロイドが使わない脳に訴えかけてるわけです。しかし、それでは彼女を助けることはできません

「私たちも比奈と一緒にいてコミュニケーションをとります!」

「それも当然お願いしたいのですが、根本的原因を取り除かなければ焼け石に水です」

「なにか……なにか解決の方法が見つかったんですか？」

「はい」

沼井は少し間を置いて続けた。

「比奈さんのフードロイド、梨乃を回収して……言葉が適切かどうかわかりませんが、処分いたします」

「できるんですか！」

悠人が少し興奮した様子で言った。

「ああ。実は悠人くん、きみがヒントをくれたんだよ」

「俺ですか？」

「悠人くん、昨日ベイズ社に行つたんじゃないのかい？」

「あ、はい。行きました」

沼井は昨日アンドロテック社に来た大曾根とのやり取りを話した。

彼は技術担当者として、大曾根との緊急ミーティングの場に呼ばれていた。

「「」これだけ噂になり出したら、どこからか逆行シンクロを証明する者が出でくるかもしない。万が一証明された場合の対処をアンドロテック側でも用意しておいてもらわないと困るんですよ」

大曾根は焦つた様子でアンドロテックのスタッフ一同に言った。

「対処といふと?」

「それはメーカーであるアンドロテックが考へるべきことでしょう。逆行シンクロが証明されてからドナーが植物状態になつたり死んだりしたら、フードロイド市場は一気に崩壊しますよ」

「うちでも逆行シンクロについては研究を進めてる。確か……沼井くん、きみがいまサンプルデータ集めをやつてるんだよな?」

「あ、はい。他社がどの程度逆行シンクロについて研究しているかはわかりませんが、うちは業界内でも力を入れているほうだと思いますよ」

「大曾根さん、ジニのメーカーも金にならないことはやらない。まあ万が一証明された場合にうちが対処する技術を持つていれば特許も取れるし、もう少し費用をまわせるように検討しますよ」

「わかりました。あと書類関係についての認識についてお願ひしちたいことがあるんです。昨日適性テストでシンクロ現象を発症する率をチェックしているんじやないかって、わざわざうちまでクレームつけにきた子供がいるんですよ。インターネットで悪い噂が

広まつてゐるから、今後こういった質問が増えるかもしない。そのときについとアンドロテックで見解が違うと困るから、そういうた質問があつた場合に逆行シンクロ現象とは一切関係ないって答えることをアンドロテック社内でもマニュアル化してほしいんです

「沼井の説明が終わると、悠人が質問をした。

「でも、肝心の回収させる方法がないじゃないですか」

「ベイズ社が嘉川さんの適性テスト結果を偽装したことを理由に回収をかけるんだ。逆行シンクロ現象というものは法的には認められないだろうが、ベイズ社とうちとの契約書には取り引きの中で虚偽の申告などがあつた場合、その契約及び関連契約の一部もしくは全部を契約時点まで遡つて解除できる、とある」

「すみませんが、難しくてよくわからないんですけど……」

「つまり簡単に言うと、今回ベイズ社が不正を働いたから、嘉川さんとうちとの契約は最初からなかつたことになる。契約がなかつたことになるのだから、その結果作られたフードロイドも全て無かつたこととなる。作られたフードロイドはうちが回収処分するが、それに伴う損害は諸悪の根源であるベイズ社が負担する、ということがだ」

「園長さん、わかります?」

悠人が園長に聞いた。

「なんとなく、だけど……」

「遊衣は……」

言いかけた瞬間、遊衣は首を横に振った。

「まあ僕も法律の専門家じゃないから全部はわかっていないけど、弁護士さんも大丈夫だと言っているから間違いないだろ?」

「でもその……さつき言つてたベイズ社が適性テストの結果を偽装したというのは証明できるんですか?」

園長が聞いた。

「ええ。それはうちに送られてきたデータと本人の証言、それに先生がたが書いてくれた書類があればじゅうぶんらしいです。ただ念のため、私が今日証拠を抑えてきました」

沼井はそう言つと、比奈が書いた適性テストの用紙を見せた。

「今日ここへ来る前に、帰り道ついでに社内マニュアルの草案を持つてきたと言つてベイズ社に寄つたんです。あそこはマネージメント会社だから、今くらいの時間までほとんどの社員が帰つてきません。社内は事務の女の子がいるくらいで、ほとんど空なんですよ。だから隙を見てこれをコピーしてきました」

「でもそれって犯罪なんじゃ……」

「かもしだせません。これをどうするかは今後弁護士と相談して決めることになります」

命の綱引き

その翌日、アンドロテックはベイズ・プロモーションを訴えた。

弁護士の判断で、逆行シンクロ現象の可能性は業界関係者であれば当然認識していることであり、適性テストを偽装することは極めて悪質であるとの内容を訴状に加えた。

逆行シンクロ現象を初めて法の場に引っ張り出したといふことで、その裁判はネット上で話題となつた。

なぜアンドロテック社は彼らの首を絞めるような裁判をするのか?

その点でも注目を浴び、マスコミもトップニュースとして取り扱つた。

そして提訴した2日後、アンドロテック社の会見が行われた。

「科学や医学で証明されていないからといって、人命に関わるかもしれないものを放つておいてはいけないんです。だから当社はこれまでドナーの適性テストを自主的に行ってまいりました。このテ

ストの目的はいくつありますが、主要目的の1つがシンクロのしやすさを見極めるというものでした。今回提携先企業の不正によりテスト結果が偽装されたことについては当社も反省しなければなりません。ですから、我々は自らの首を絞めることにならうと一番の被害者であるドナーを救う決意をいたしました」

そこまで話すと、社長は沼井に続きを話させた。

「いま、1人の少女が大変危険な状態にあります。彼女は非常にシンクロしやすく、早急にフードロイドの回収処分を行わなければ記憶や感情を失い、やがてフードロイドと同じようになってしまします。どうか、皆さんのお力添えをお願いいたします！」

比奈がドナーとなつた経緯についても触れ、沼井のその言葉が世論と裁判員の心を動かした。

会見から3日後、裁判所はベイズ社に対して、アンドロテック社へ当該フードロイドの回収処分の依託を申し出るよう仮処分を下した。

しかし、そのとき比奈は既に言葉もしゃべらず、人とフードロイドとの境目を彷徨ついていた。

「比奈つー！」

神に祈るように順番に比奈の手を握り、意識の回復を願つた。

園長、悠久、遊衣の3人は、それぞれ仕事や学校を休み、アンドロテック社に泊り込んでいた。

「比奈……なんでこんなことに……お金がないんならいつだって園に戻つてくればいいんだって、あれほど言つておいたのに……でも、一生懸命頑張つたんだよね……誰にも頼らないで、自立して生きてこひつてさ……」

「比奈、なんでアンタが逆行シンクロのこと言わないでアタシがドナーになることに反対してたのかわかつたよ。あのときからもうこうなること知つてたんだよね。アタシに心配かけたくないから言わなかつたんでしょう？アタシ比奈みたいに頭よくないからそんな話を聞いても泣いて騒ぐだけだもんね。……でもさ、迷惑かもしれないけどアタシは正直に言つて欲しかつたな……」

「俺さ、比奈と遊衣のことずっと羨ましいなあつて思つてたんだ。俺には友達はいるけど、比奈と遊衣みたいな関係になれたことはないんだ……」

3人は交代で比奈の手を握つたり頬を撫でたりしながら比奈に語りかけた。

「……いの……かないで……ワタ……シを……いのかないで……」

回収処分開始から3時間後、比奈が命乞いの言葉を頻繁に発する

よつになつた。

園長たちからその報告を受けたアンドロテック社は、技術者全員を集めて緊急会議を開いた。

「殺さないでといつ言葉ですが……これは多分、梨乃が思つていることではないかと考えられます」

「梨乃が思つてゐる? フードロイドには感情も知能もないんだから、死への恐怖も感じないはずでしょ?」

「正確には梨乃が思つてゐるのではなく、梨乃から発せられた死の感覚がドナーに伝わり、ドナーが死の恐怖を感じてゐるのかもしれません」

「これを見てください。梨乃が1体処分される度にドナーの脳波等に特徴的な変化が見られます。これは推測に過ぎませんが、梨乃から発せられる死の情報により強いシンクロが起きているものと思われます」

「でも処分は安楽死ですよね? 眠ることと変わらないんですね?」

「シンクロのメカニズムが解明されていない段階で、我々の思い込みで話を進めることが間違っています。死の感覚を感じるのは、なにも脳だけとは限らない。脳は薬で眠っていても生体が活動を停止するときには、数十兆～数百兆もの細胞が死滅していくんです。これら全細胞が一齊に悲鳴を上げて強いシンクロを引き起こしているのかもしれません」

「なるほど……それで、なにか対策案は?」

「1つは梨乃への投薬のタイミングを変えることです。時間差を設けて投薬していったほうが影響が少ないので、複数の個体に対し同時に投薬して早く終わらせるほうが影響が少ないので。少しずつ変えてよりドナーへの影響が少ない方法を探っていきます。もう1つは、梨乃が生命活動を停止していく瞬間、ドナーの人間的な部分に強く訴えかけることです。これには、園長さん、悠久くん、遊衣さんに頑張つてもらわなくてはいけません。タイミングはこちらから伝えますので、そのとき集中的にドナーを刺激してください」

「刺激つてこののは……？」

「フードロイドにはできない体験談やそのときの感情が湧きあがってくるような話をわかりやすい言葉で語りかけてください。思い出話でもいいし、彼女が大好きだったものの話でもいい」

沼井は、廊下の長椅子で休んでいた悠久にコーヒーを差し出して声をかけた。

「悠久くん、おつかれさま」

「沼井さん……」

「1つはどちらでしか見てないけど、実際の比奈ちゃんの様子はどう？」

「やつぱり、梨乃の処分がある度にシリヤツにしてこます

「……そんな姿を見るきみたちも辛いだろ? な……」

「でも、沼井さんのおかげでこじまで来れたんだから、俺たちが弱音を吐くわけにはいきません」

「……今回の件だけ……実はどうして元々は内部告発を考えていたんだよ」

「内部告発……ですか?」

「ああ。内部的には逆行シンクロについてかなりのことを把握しているのに、そのデータを発表しようとしないアンドロテックに対してね。その準備があつたから、社長も折れたんだ」

「でも、その準備があつたおかげで比奈は助かる望みが出てきた……沼井さんは命の恩人です」

「……悠人くん。一つ報告があるんだ……比奈ちゃんに影響の少ない投薬のタイミングが徐々にわかつてきたんだよ」

「ほんとですか? ? !」

「ああ。……ただ残念ながら我々が望む結果ではなかつたんだ。もし同時に多数の個体を処分できるのであれば、他のメーカーや医療機関にも協力してもらって処分のスピードをあげよつと考えていた。しかし同時処分はシンクロ率が高くなり過ぎて危険なんだ」

「……じゃあ、当初の予定よりも時間がかかるつてこいつのことです

か？」

「そうだ。1日も早く全ての梨乃を処分しなくちゃいけないのに、それができない……」

「だいたいどのくらいかかるんですか？」

「1日に処分できる数は、24時間フル稼働しても150体くらいが限界だ。比奈ちゃんの消耗度合いに応じて休憩を入れないといけないから実際には100体くらいだろう。残りの数を考えるとあと1週間くらいは必要だと思つ」

「そんな……もう間に合わないじゃないですか！」

「……あとは悠久くんたちに頑張つてもうつしかないんだよ」

しばらく間を置いて、沼井は続けた。

「こつからはフードロイドと悠久くんたちの綱引き勝負だ。比奈ちゃんが持つていかれないように、頑張つて彼女の心に呼びかけるしかない」

「比奈……あんた小さい頃さ、よくこうやって私の手を握つて眠つたの覚えてる?寂しがり屋でしょ、よく泣いて私のこと困らせたつけ……」

園長が比奈に語りかけていると、田の前にある黄色のランプが点滅を始めた。

「」のランプの点滅開始から2分後に梨乃への投薬が開始され、点滅から点灯に変わるタイミングが梨乃の生命活動が停止する瞬間だつた。

園長たちは、ランプが点滅したら比奈の感情を搖さぶるような話をスタートさせ、点灯の瞬間までにボルテージを上げるよう指示されていた。

「比奈、小学校4年生のときの遠足覚えてる？楽しかったよねえ……一緒に弁当作つてね……」

「……死に……たく……い……」

苦しそうに命乞うをする比奈の姿を見て、園長は涙が止まらないなかつた。

「……私が……ワインナー焼いて……比奈がタコさんがいって……」

園長は詰まりながらも、必死になつて焦点の定まらない比奈の目を見つめながらしゃべり続けた。

人間性を失つてゆく比奈を見ながら過ぐす毎日は、まるで延々と

続く通夜のようだった。

3人の精神的磨耗は激しく、最後のフードロイドが処分されたときには比奈の名を呼ぶのが精一杯だった。

誕生日

「比奈、今日はすゞく天気がいいよ」

遊衣はそう言って、部屋のカーテンを開けた。

「もう少ししたら悠人も来るつて。今日は誕生会なんだよ」

ガラツ……

「比奈、誕生日おめでとうー。」

突然部屋の扉が開き、悠人が大きな花束を抱えて部屋に入ってきた。

「すゞーいーーー。」

「だろ?」れとは別でもう一個用意してあるんだぜ」

「悠人ーあんた園に入るときは挨拶してからってあれほど言つたでしょー！」

部屋の外から園長が言つた。

「悠人また何も言わずに入つてきたの？」

「玄関に誰もいなかつたからで……」

「やつきーの部屋入るときも突然入つてきたけどさ、女の子の部屋なんだから次からはちゃんとことわつてから入りなさいよー。」

「いや、今日は特別だよ。驚かせうと思つて……」

「3人とも、もう準備できたから食堂に集まつなさい」

園長はやつすつと、一足先に1階へと下りて行つた。

「ハッピーバースデー！ウーラー！ハッピーバースデー！ウーラー！ハッピーバースデイ、ティア比奈ちゃん……ハッピーバースデイトウーゴー！」

「比奈ーおめでとうーーー！」

「比奈ちゃん、お誕生日おめでとうーーー！」

「比奈、これは園のみんなからよ」

園長が渡したその箱には、比奈の似顔絵や手作りのブローチなどが納められていた

「比奈、これは俺から！」

悠人は比奈に小さな箱を渡した。

「あらあら、さつきの花束に比べると随分とまた小さな箱ね」

園長が冗談ぽく言つと、会場内に笑い声が響いた。

「プレゼントは大きさじゃないんだよー！」

「「じめん」めん、冗談よ。で、中身はなんなの？」

「それは開けてからのお楽しみだよ」

「じゃあ、次はアタシからね」

遊衣はさつまつとプレゼントの箱を比奈の膝の上に置いた。

「遊衣のプレゼントはなに？」

園長が聞いた。

「先生じめんね。アタシも比奈が開ける田まで内緒にしておく。

一番最初に比奈に見てもらいたいから……」

あとがき

人の死の場面というのは、ほとんどの人が生きていこうちに遭遇します。

それが他人であれば冷静に見られる人でも、身近な人の死となると途端に冷静ではいられなくなるものです。

特に残酷なのは、死そのものよりも死の過程です。

それまで元気だった人、たくさんの時間を一緒に過ごしてきた人が苦しむ姿を見ることや、話ができなくなっていくという過程。

フードロイドはフィクション作品ですが、この作品には私の実体験を盛り込んであります。

実体験をそのまま書くよりも、複数の体験や問題提起を凝縮して書きたかったのでこのようなストーリーに仕立てました。

特に、性交渉によるHIV感染が増えている10代の子供たちが、病気や死を他人事と思わないように主人公を高校生にしました。

10代のHIV感染者が増えているのは、知らないことをする前にそれすることによるリスクをあまり考えない人が多いことの表れだと思います。

車を運転すれば事故に遭う危険が、セックスをすれば病気になる危険が、さらには人と知り合うことさえもトラブルになる危険があるのです。

リスクを恐れてばかりでは何もスタートしない。それも事実です。比奈はリスクを承知でドナーとなりました。

しつかり者の彼女ですが、誰にでも判断の過ちはあります。ましてや彼女は大曾根に騙されていたわけですから仕方のないことかもしれません。

遊衣は、比奈がドナーとなつたことから自分もドナーになろうと考えました。

「あの子がやつているから大丈夫」

この感覚が危険なのです。

HIVに感染した多くの人は、まさか自分の彼氏や彼女が感染者であるとは考えもしていなかつた人たちです。

遊衣にはそれだけではなく、比奈と一緒にいたいという強い思いがありました。

それは自分がそうありたいという感情と、比奈に対する愛情の両方から望んでいたことです。

2人の友情・愛情は私もうらやましく思います。

しかし感情に流されて2人とも死ぬことは、私には正しい結果だとは思えません。

生きていても苦痛しかないという後追い自殺であれば、ある程度仕方がないのかなとも思います。

しかし若い人には未来があります。

恋人との別れ、家族の死など、人生には「これで終わりだ」と感じるシーンが何度も訪れます。

そこで本当に終わりにしてはいけません。

私もこれまでに何度か残酷な現実に向き合い、自殺を考え、死を覚悟しました。

結果死なずに生きてきたわけですが、その時には考えられなかつたような幸せな瞬間も、その後にありました。だから簡単に死んではいけないのです。

HIVに感染しても、生きているうちに治療法が発見されるかもしません。

その事実に習い、このストーリーのラストには可能性を残してあります。

また命の綱引きのシーンでは、BSEへの恐怖を少しだけ含ませています。

これはテレビで観ただけのことですが、知人がヤコブ病になつたという代議士さんの話があります。

その方は知人の死の過程について、次のように話していたと記憶しています。

「彼の脳は徐々に侵食され、人間性を失つていつた。やがて植物状態のようになつたが、ときおり音や光に反応して怯えるように体が反応していた。私には彼が苦しみの闇を延々と彷徨つているように見えた」

私が目の当たりにした死の場面も凄惨なものでした。誰もが眠るように死ねるわけではないのです。

そして誰もが、愛する人には苦しみのない最後を迎えて欲しいと思うはずです。

だからヤコブ病になる可能性、BSE牛である可能性が少しでもあれば、それを動物・人の口に入れてはいけないのです。

アメリカで牛肉を扱っている人たちの多くは、海の向こうの日本人を人のように感じていらないのかもしれません。

人だという実感が薄い者の命よりも自分の財産のほうが大事だと考えたのでしょう。

自分のため、自分が愛する人のために、どういう社会、国、世界になればいいのか考えてみてください。

比奈を自分、園長先生を皆さんのお母さんに置き換えて考えてみてください。

あなたが死ぬ時、自分よりも残された者が悲しむのです。

(後書き)

お読みいただき、有難うございました。
よろしければ、
<http://babys.jp>
も「」見てください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0816d/>

フードロイド

2011年1月8日21時26分発行